

『山椒魚』 井伏鱒二

山椒魚は悲しんだ。

彼は彼の棲家(すみか)である岩屋から外に出てみようとしたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることができなかつたのである。今はもはや、彼にとっては永遠の棲家である岩屋は、出入り口のところがそんなに狭かつた。そして、ほの暗かつた。強いて出て行こうとこころみると、彼の頭は出入り口を塞ぐ(ふさぐ)コロップの栓となるに過ぎなくて、それはまる二年の間に彼の体が発育した証拠にこそはなつたが、彼を狼狽(ろうばい)させ且つ(かつ)悲しませるには十分であつたのだ。

「何たる失策であることか！」

彼は岩屋のなかを許されるかぎりひろく泳ぎまわってみようとした。人々は思いぞ屈せし場合、部屋のなかを屢々(しばしば)こんな具合に歩き回るものである。けれど山椒魚の棲家は、泳ぎまわるべくあまりに広くなかつた。彼は体を前後左右に動かすことができただけである。その結果、岩屋の壁は水あかにまみれて滑らかに感触され、彼は彼自身の背中や尻尾や腹に、ついに苔が生えてしまったと信じた。彼は深い嘆息(たんそく：ため息)をもらしたが、あたかも一つの決心がついたかのごとく呟(つぶや)いた。

「いよいよ出られないというならば、俺にも相当な考えがあるんだ」

しかし彼に何一つとして上手い考えがあるどうりはなかつたのである。

岩屋の天井には、杉苔と銭苔とが密生して、銭苔は緑色の鱗(うろこ)でもって地所とり(小児の遊戯の一種)の形式で繁殖し、杉苔は最も細く且つ(かつ)紅色の花柄の先端に、可憐(かれん)な花を咲かせた。可憐な花は可憐な実を結び、それは隠花植物の種子散布の法則通り、まもなく花粉を散らし始めた。

山椒魚は、杉苔や銭苔を眺める(ながめる)ことを好まなかつた。寧ろ(むしろ)それ等を疎んじ(うとんじ)さえした。過ぎ苔の花粉はしきりに岩屋のなかの水面に散つたので、彼は自分の棲家の水が汚れてしまうと信じたからである。剩え(あまつさえ：その上)岩や天井の凹みには、一群ずつの黴(かび)さえも生えた。黴は何と愚かな習性を持っていたことであろう。常に消えたり生えたりして、絶対に繁殖して行こうとする意志はないかのようであつた。山椒魚は岩屋の出入り口に顔をくっつけて、岩屋の外の光景を眺めることを好んだのである。ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。そして小さな窓からのぞき見するときほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

谷川というものは、めちゃくちゃな急流となつて流れ去つたり、意外なところで大きな淀み(よどみ)をつくっているものらしい。山椒魚は岩屋の出入り口から、谷川の大きな淀みを眺めることができた。そこで水底に生えた一叢(ひとむら)の藻が朗らかな(ほがらかな)発達を遂げて、一本ずつの細い茎でもって水底から水面まで一直線に伸びていた。そして水面に達すると突然その発育を中止して、水面から空中に藻の花をのぞかせているのである。多くの目高たちは、藻の茎の間を泳ぎ抜けることを好んだらしく、彼らは茎の林のなかに群れをつくつて、互いに流れに押し流されまいと努力した。そして彼等の一群は

右によろめいたり左によろめいたりして、彼等のうちの或る（ある）一びきが誤って左によろめくと、他の多くのものたちは他のものに遅れまいとして一せいに左によろめいた。若し（もし）或一びきがもの茎に邪魔されて右によろめかなければならなかったとすれば、他の多くの小魚達はことごとく、ここを先途（せんど）と右によろめいた。それ故、彼等のうちの或一びきだけが、他の多くの仲間から自由に遁走（とんそう）して行くことは甚だ（はなはだ）困難であるらしかった。

山椒魚は、これ等の「小魚達を眺めながら、彼等を嘲笑（ちょうしょう）してしまった。「なんという不自由千万な奴らであろう！」

淀みの水面は絶えず緩慢な渦（うず）を描いていた。それは水面に散った一片の白い花卉によって証明できるであろう。白い花卉は淀みの水面に広く円周を描きながら、その円周を次第に小さくしていった。そして速力をはやめた。最後に、極めて小さな円周を描いたが、その円周の中心点に於て（おいて）、花卉自体は水の中に吸いこまれてしまった。

山椒魚は今にも目がくらみそうだと呟いた（つぶやいた）。

或る夜、一びきの小蝦（こえび）が岩屋のなかへまぎれ込んだ。この小動物は今や産卵期のまっただなかにあるらしく、透明な腹部一ぱいにあたかも雀の稗草の種子に似た卵を抱えて、岸壁にすがりついた。そうして細長いその終りを見届けることができないように消えている触手を振り動かしていたが、いかなる量見であるか彼は岸壁から跳びのき、二三回ほど巧みな宙返りをこころみて、今度は山椒魚の横っ腹にすがりついた。

山椒魚は小蝦がそこで何をしているのか、ふりむいて見てやりたい衝動を覚えたが、彼は我慢した。ほんの少しでも彼が体を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去ってしまったであろう。

「だが、このみもちの虫けら同然のやつは、一たいここで何をしているのだろうか？」

この一びきの蝦は山椒魚の横原を岩石だと思い込んで、そこに卵を産みつけていたのに相違ない。さもなければ、何か一生懸命に物思いに耽って（ふけて）いたのである。

山椒魚は得意げに言った。

「くったくしたり物思いに耽ったりするやつは、莫迦（ばか）だよ」

彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した。いつまでも考え込んでいるほど愚かなことはないではないか。今は冗談ごとの場合ではないのである。

彼は全身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかえて、そこに厳しくコロップの栓をつめる結果に終わってしまった。それ故、コロップを抜くためには、彼は再び全身の力を込めて、うしろに身を退かなければならなかったのである。

この騒ぎのため、岩屋のなかではおびただしく水が汚れ、小蝦の狼狽（ろうたい）と言っては並たいていではなかった。けれど小蝦は、彼が岩石であろうと信じていた棍棒の一端が、いきなりコロップの栓となったり抜けたりした光景に、ひどく失笑してしまった。全く蝦（えび）くらい濁った水の中でよく笑う生物はいないのである。

山椒魚は再びこころみた。それは再び取ろうに終わった。何としても彼の頭は穴につか

えたのである。

彼の目から涙がながれた。

「ああ神様！ あなたはなさないことをなさいます。たった二年間ほど私がうっかりしていたのに、その罰として、一生涯この審(あなぐら)に私を閉じこめてしまうとは横暴であります。私は今にも気が狂いそうです」

諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであろうが、この山椒魚にいくらかその傾向がなかったとは誰がいえよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない。すでに彼が飽きるほど暗黒の浴槽につかりすぎて、もはやがまんがならないでいるのを、諒解(りょうかい)してやらなければならない。いかなる癡癡病者(ふうてんびょうしゃ：精神異常者)も、自分の幽閉されている部屋から解放してもらいたいと絶えず願っているではないか。最も人間嫌いの囚人でさえも、これと同じことを欲しているではないか。

「ああ神様、どうした私だけがこんなやくざな身の上でなければならないのです？」

岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでいた。彼等は小なるものが大なるものの背中に乗っかり、彼等は唐突な蛙(かえる)の出現に驚かされて、直線をでたらめに折り曲げた形に逃げまわった。蛙は水底から水面に向かって勢いよく律をつくって突進したが(一直線に突進したが)、その三角形の鼻先を空中に現すと、水底に向かって再び突進したのである。

山椒魚はこれらの活発な動作と光景とを感動の瞳で眺めていたが、やがて彼は自分を感動させるものから、寧ろ(むしろ)目を避けた方がいいということに気がついた。彼は目を閉じてみた。悲しかった。彼は彼自身のことを譬(たと)えば(たとえば)ブリキの切屑(きりくず)であると思ったのである。

誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬(たと)えてみることは好まないであろう。ただ不幸にその心をかきむしられた者のみが、自分はブリキの切屑(きりくず)だなどと考える。確かに彼等は深くふところ手をして物思いに耽(た)ったり、手ににじんだ汗をチョッキの胴で拭(ぬ)ったり(ぬぐったり)して、彼等ほど各々(おのおの)好みのままの恰好(かっこう)をしがちなものはないのである。

山椒魚は閉じた目蓋(まぶた)を開こうとしなかった。何となれば、彼には目蓋を開いたり閉じたりする自由とその可能とが与えられていただけであったからなのだ。

その結果、彼の目蓋のなかではいかにも合点のゆかないことが生じたではなかったか！目を閉じるという単なる形式が巨大な暗やみを決定してみせたのである。その暗やみは再現もなく拡がった深淵(しんえん)であった。誰しもこの深淵の深さや広さを言い当てることはできないだろう。

—どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚がかかると常識に没頭することを軽蔑(けいべつ)しないでいていただきたい。牢獄(らうごく)の見張り人といえども、よほど気難しい時でなくては、終身懲役(しんしんちやうやく)の囚人が徒(いた)ずらに歎息(たんそく)をもらしたからといって叱(な)りつけ派(は)しない。

「ああ寒いほどひとりぼっちだ！」

注意深い心の持主であるならば、山椒魚のすすり泣きの声が岩屋の外にもれているのを聞きのがしはしなかったであろう。

悲歎にくれているものを、いつまでもその状態に置いてくのは、よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかった。そして或る日のこと、岩屋の窓からまぎれ込んだ一びきの蛙を外に出ることができないようにした。蛙は山椒魚の頭が岩屋の窓にコロップの栓となったので、狼狽のあまり岸壁によじのぼり、天井にとびついて錢苔の鱗にすがりついた。この蛙というのは淀みの水底から水面に、水面から水底に、勢いよく往来して山椒魚を羨ましがらせた(うらやましがらせた)ところの蛙である。誤って滑り落ちれば、そこには山椒魚の悪党がまっている。

山椒魚は相手の動物を、自分と同じ状態に置くことのできるのが痛快であったのだ。「一生涯ここに閉じ込めてやる！」

悪党の呪い言葉は或る期間だけでも効験がある。蛙は注意深い足どりで凹みにはいった。そして彼は、これで大丈夫だと信じたので、凹みから顔だけ洗わせて次のように言った。

「俺は平気だ」

「出てこい！」

山椒魚は呶鳴った(どなった)。そうして彼等は激しい口論をはじめたのである。

「出て行こうと行くまいと、こちらの勝手だ」

「よろしい、いつまでも勝手にしてろ」

「お前は莫迦だ」

「お前は莫迦だ」

彼等がかかる言葉を幾度となく繰り返した。翌日も、その翌日も、同じ言葉で自分を主張し通していたわけである。

一年の月日が過ぎた。

初夏の水や温度は、岩屋の囚人達をして鉋物から生物に蘇らせた。それで二個の生物は、今年の夏いっぱいを次のように口論しつづけたのである。山椒魚は岩屋の外に出て行くべく頭が肥大しすぎていたことを、すでに相手に見ぬかれてしまっていたらしい。

「お前こそ頭がつかえてそこから出て行けないだろう？」

「お前だって、そこから出ては来れまい」

「それならば、お前から出て行ってみろ」

「お前こそ、そこから降りて来い」

更に一年の月日が過ぎた。二個の好物は、再び二個の生物に変化した。けれど彼等は、今年の夏はお互い黙り込んで、そしてお互いに自分の歎息が相手に聞こえないように注意していたのである。

ところが山椒魚より先に、岩の凹みの相手は、不注意にも深い歎息をもらしてしまった。それは「ああああ」という最も小さい風の音であった。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の歎息を唆した(そそのかした)のである。

山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかった。彼は上の方を見上げ、かつ友情を瞳に罩めて(こめて)たずねた。

「お前は、さっき大きな行きをしたろう？」

「それがどうした？」

「そんな返辞をするな。もうそこから降りて来てもよろしい」

「空腹で動けない」

「それでは、もう駄目なようか？」

相手は答えた。

「もう駄目なようだ」

よほど暫く(しばらく)してから山椒魚はたずねた。

相手は極めて遠慮がちに答えた。

「今でもべつにお前のことをおこってはいないんだ」